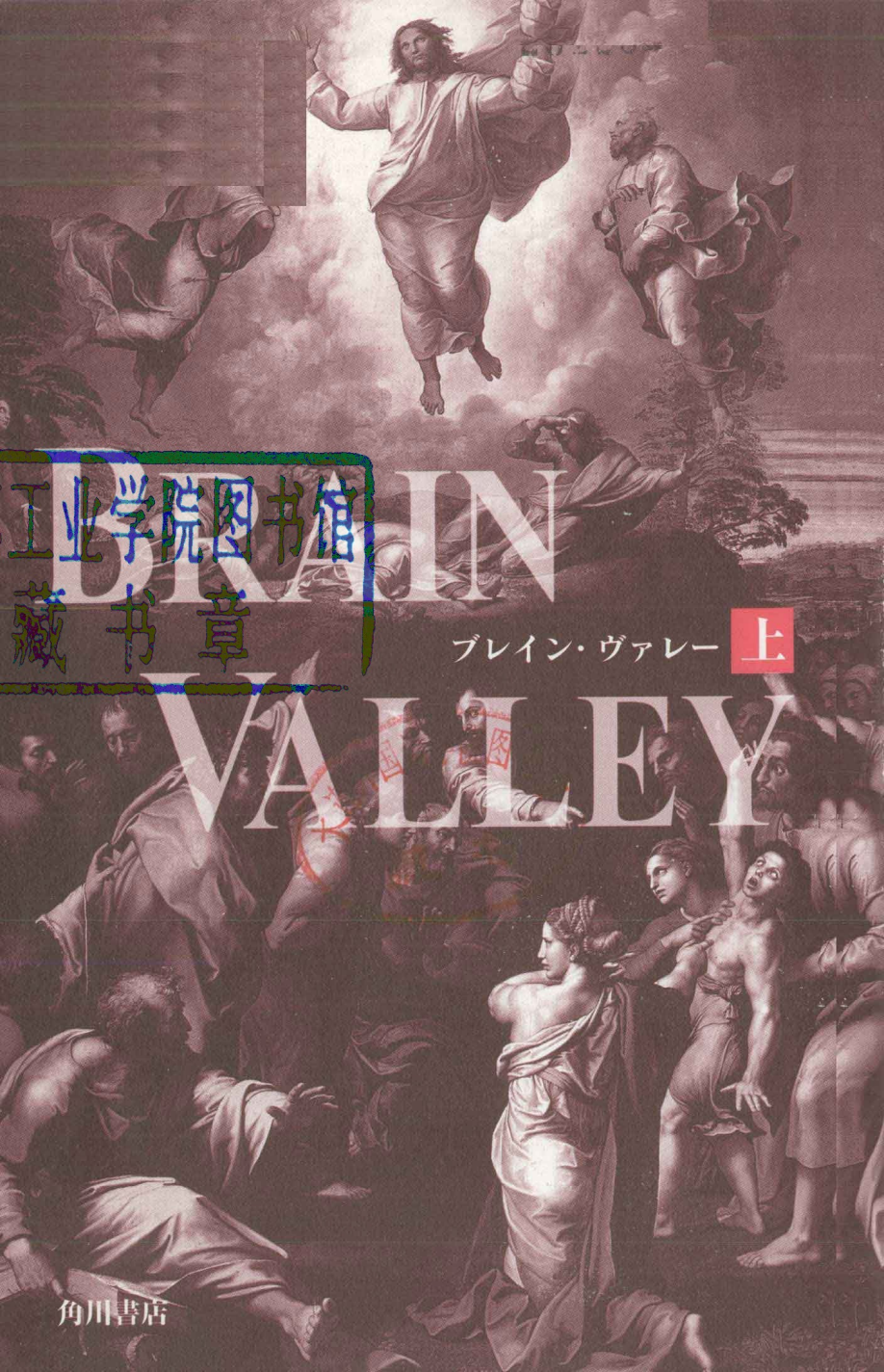
瀬名秀明

Hideaki Sena

# BRAIN VALLEY

ブレイン・ヴァレー 上



# BRAIN VALLEY

ブレイン・ヴァレー 上

工业学院图书馆
藏书章

角川書店

**瀬名秀明**（せな・ひであき）
1968年静岡県生まれ。仙台市在住。
95年、「パラサイト・イヴ」で第二回日本ホラー小説大賞受賞。
96年、東北大学大学院薬学研究科（博士課程）修了。
97年4月、宮城大学看護学部常勤講師となる。
その他の作品に「Gene」（アンソロジー「絆」所収、カドカワノベルズ）など。

# BRAIN VALLEY（上）

**瀬名秀明**
1997年12月5日　初版発行

発行者／角川歴彦
発行所／株式会社角川書店
東京都千代田区富士見2-13-3　〒102-8177　振替 00130-9-195208
TEL　営業 03-3238-8521　編集 03-3238-8451
印刷所／暁印刷株式会社
製本所／株式会社鈴木製本所

落丁・乱丁本はご面倒でも小社角川ブック・サービス宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。
© Hideaki Sena 1997 Printed in Japan
ISBN4-04-873060-6　C0093

¥1400

## CONTENTS 上巻


プロローグ…… 5

第一部　ブレインテック…… 23

第二部　オメガ・プロジェクト…… 297


# BRAIN VALLEY

## CONTENTS 下巻


第二部　オメガ・プロジェクト（承前）…… 5

第三部　キリストの変容…… 197

エピローグ…… 394

謝辞…… 401

主要参考文献

カバーCG／河口洋一郎
装丁／角川書店装丁室

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

# BRAIN VALLEY

私の言う「驚くべき仮説」とは、あなた――つまりあなたの喜怒哀楽や記憶や希望、自己意識と自由意志など――が無数の神経細胞の集まりと、それに関連する分子の働き以上の何ものでもないという仮説である。

――フランシス・クリック

『DNAに魂はあるか』（中原秀臣訳）より

# プロローグ

## 九月二九日（月）満月

一分前ですとタイムキーパーの女が声を上げる。柳沢友之は前方の壁に並ぶ大小のモニタを見つめたまま椅子から立ち上がった。両手で二度、頬をはたく。いつから始めた癖なのか覚えていない。だが一分前には必ず立ち上がる。顔をはたいて気合いを入れる。本番中は座ることはない。いくらチーフディレクターだからといえ、生放送という代物は座って見ていられるほど悠長なものではないのだ。

もう二日ほど寝ていなかった。放送の直前はいつもそうだ。ろくに着替えもせず風呂にも入っていないから臭うに違いない。常識的に考えれば筋肉が弛れてもおかしくない状態だ。だが緊張を維持させなければならない。実際、柳沢の全身の神経は活発に発火していた。いつどんな場合であっても本番中に反射神経がベストコンディションになるようにしてある。放送が始まってしまったら、あとは瞬発的な判断力が全てだ。筋肉を精神力で動かすのだ。柳沢だけではない。この第三調整室に詰めている一五人近いスタッフ全てが反射神経で動く。全員で暴走する大型車を運転するようなものだ。頭だけでは車を運転できない。だから立ち上がり、頬をはたく。

「三〇秒前。VTRから入ります」

TKがカウントダウンを続けている。中央に掲げられている大きな丸時計が秒針を進めてゆく。入社したての頃、柳沢はスタジオや調整室の時計を見るたびに小学校の教室の壁時計を思い出したものだ。巨大な針は堅牢な楔のようで、一秒たりとも曖昧にはさせまいとでもいうような迫力があった。いまでは多少であれば自分の裁量で時の速さをコントロールできることも知っている。むしろ状況にあわせて臨機応変に対応できるほうが望ましいのだ。それが番組の本来の姿だとも考えていた。だから柳沢は楔のような秒針が好きではなかった。放送局では秒針が動くことによって時が動いてゆく。ドラマもバラエティも、そして報道も、秒針によって追い立てられる。いつか秒針を追い立てる側になってみたいと思っていた。大きな事件の報道を陣頭で指揮してみたいと夢想することもたまにあった。だがそれはこれまでのところ叶わなかった。いまの柳沢の仕事はくだらない娯楽番組だ。どうやって秒と秒の間を嘘で埋めるかに頭を悩ましている毎日だった。

モニタの群れを眺め渡す。丸時計の左右に据えられているモニタでは高速道路を走る高級車の姿が映し出されている。いま現在、実際に放送されているCMだ。この画面が電波として発信され、日本国中のテレビにそのままコピーされることになる。左側のモニタにだけは大きくカウントがオーバーラップされている。二〇、一九と数字が減ってゆく。開始までの残り秒数だ。その下に並んでいる五つのモニタにはフロアの中が映っている。第三スタジオだ。大きくもなければ小さくもない、ごく平均的なバラエティ用のスタジオである。宇宙をイメージしたセットの手前に、弧を描くような形でデスクを設置してある。中央には司会のアナウンサーとアシスタントの女性、そして両脇にふたりずつゲストを並べてある。モニタには映っていないが、スタジオ内に

は一五人ほどのスタッフが入っている。別のモニタでは番組の最初にかかるVTRがスタンバイされポーズしている。中継車とヘリの映像、社屋の屋上にある天カメの映像も用意されている。時計のすぐ下にあるモニタにはスーパーが黒い画面に浮き上がっている。下のほうで横一列に並んでいる十数個のモニタにはそれぞれ他局の映像が映っている。

「一〇秒前」

日本カー・オブ・ザ・イヤー受賞、という文字が画面一杯に現れる。CMが終わりに近づいていた。柳沢の立っている位置は調整室の最後方なのでスタッフたちの様子が見て取れる。TKの横に座っているふたりのコーナー担当ディレクターが立ち上がった。やはり座っているよりそのほうが指示を出しやすいのだ。右側に立っている若いほうのディレクターはとんとんと指先で机を叩きリズムをとっている。ディレクターたちの右には照明、そしてビデオエンジニアらが座っている。左には6㎜やCDを操作する音声たち、そして一歩下がって右側には中継スタッフだ。

「五、四、三、二、一……」

柳沢は大きく息を吸った。時計の秒針が頂上に近づく。午後九時になろうとしている。

正面のモニタが切り替わった。VTRが自動起動したのだ。派手なBGMが調整室の中に鳴り響く。

《今夜ついにUFO出現か？　テレビの前のあなたが証人になる！》

有名なUFOの写真が次々と映し出される。続いて模型を使った合成フィルムが回る。楕円状の光が画面一杯になる。すでに編集されているVTRだ。今回の放送枠のうち四〇分近くは事前に撮られたVTRに充てられている。様々なところから集めたビデオや写真である。すでにナレ

ーションも吹き込みを終えている。
「回線大丈夫だな？　遅れるなよ。スタジオのあとすぐに変わるんだぞ」左側のディレクターが叫ぶ。
「ＯＫです」その後方に座っている中継スタッフのひとりがわめく。ここでは全員が声を張り上げる。音声や効果音にかき消されないよう、どうしても大声になってしまうのだ。
　モニタには一通のＦＡＸが現れていた。暗い照明で撮影してあるので詳細は見えない。どことなく秘密めいた感じを出そうとしてある。
《全ては編成局に極秘ニュースが寄せられたことから始まった。この日本に、なんとＵＦＯが定期的に出現する場所が存在するという。しかもそのＵＦＯを呼び寄せているのが若き美女だというのだ》
　もちろんこのＦＡＸはやらせである。本当の情報源は伏せておいてくれという指示がプロデューサーのほうから下っていたのでＦＡＸをでっち上げたのだ。この程度のやらせは許容範囲だろう。
「ＶＴＲあと一分でスタジオ入ります」とＴＫ。
「２カメ、正面から。挨拶のあとですぐにクレーン」
　ディレクターが左手でインカムを引き寄せた。その声はマイクを通じてフロアのカメラマンに繋がっている。司会者の顔のズームが微調整される。
《ここ数年、世界各国でＵＦＯの目撃件数が飛躍的に増大している。一九八九年一一月、ベルギー上空に現れたホームベース形のＵＦＯは数千人の市民によって目撃された。また隣の韓国でも



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

鮮明な写真が一流の報道カメラマンによって撮影され、大きな話題を呼んでいる。旧ソ連からも多くのUFO写真が明るみに出た。そして相次ぐミステリーサークルやキャトルミューティレーション事件。アメリカ・ネヴァダ州エリア51の疑惑。これらは単なる偶然だろうか？　何かの前触れではないだろうか？》

色鮮やかなUFO写真がフラッシュされてゆく。ベルギーの写真はいかにもそれらしいし、キャトルミューティレーションの現場も目を惹く。だがそれらを見ながら、柳沢は心の中でばかばかしいと呟いた。この部分のナレーションは柳沢が書いたものだが、仕事のためにやっているのだとでも思わなければ自尊心が許さないだろう。今回の特番を作るにあたって関連書には一通り目を通した。ベルギーの一件はひょっとしたらという気を起こしたが、それ以外はほとんど幼稚な与太話にしか思えなかった。ミステリーサークルは悪戯だということが判明している。牛の内臓がえぐり取られるというキャトルミューティレーション事件も、おそらく野犬か何かの仕業だろう。エリア51の一連の情報に到っては自称UFO研究家の被害妄想なのではないかとさえ感じた。ただし、そんな結論では視聴率は取れない。番組の前半は目撃談やフィルムの検証で時間を稼ぐ手筈になっていた。明らかなトリック写真は登場させない。本当らしさを強調させるように台本を練ってある。科学的なアプローチを装い、なおかつミステリーを感じさせるのだ。そうしなければ番組全体の胡散臭さがすぐに露呈してしまう。

《今回我々の取材に応じた女性は、いわゆるコンタクティーと呼ばれるUFO信奉者ではない。彼女は生まれついたときから超常的な力を持っていたという。その彼女が今晩UFOを呼び寄せると我々に宣言した！》

昔は目撃証言や写真だけで視聴率を稼ぐこともできた。だがいまは違う。新ネタが欲しい。テレビであることのメリットを最大限に生かすような新ネタだ。できれば生きて動いている宇宙人の姿を撮影したビデオ、宇宙人の声、そういったものが視聴者をとらえるのだ。ライヴがなければ他局に負ける。

だが、そんなトップニュースはおいそれと現れない。そのため近年はＵＦＯ番組が成立しにくくなっていた。今回の企画が浮上したのは、古典的な煽りの手法を現代風にアレンジするという提案が出されたためだ。柳沢自身、本当にＵＦＯが出現するなどとは考えていない。これまでのパターンとしては、ＵＦＯ多発地帯といわれる場所にカメラを設置し、ＵＦＯが現れますと煽るだけ煽り、結局現れませんでしたで終了する。だが今回の番組はＵＦＯを呼び寄せるという女のほうにスポットを当てる。この女はなかなかの喰わせものだ。ＵＦＯが現れなくともいい絵がとれる可能性がある。

しかし、と柳沢は思った。いくら屁理屈をつけているとはいえ、作り物であることに変わりはない。単なるバラエティだ。自分はこんなものをやるために入社したのか。何年も人々の記憶に残るようなどっしりとした番組を作りたかったのではないのか。こんな番組に何の意味があるだろう。もちろん仕事は完璧にこなす。それはプロとして当然だ。しかし現実にやっていることは、無意味なものを並べて意味あるように錯覚させることだ。ばかげている。だが、ばかばかしいものほど数字を取る。

《今夜、我々は彼女の予言にあわせて、まったく新しい角度からＵＦＯ問題にアプローチする。果たしてＵＦＯは未来からの啓示なのか、それとも悪夢のシナリオなのか？》

「VTRあと一〇秒……、五、四、三、二、一、はいスタジオ」
スイッチャーがテイクボタンを叩く。画面がフロアにスイッチされる。アナウンサーとアシスタントが声を合わせる。
「緊急特番！　今夜UFOが飛来する！」
「はい音楽！　クレーン！」ディレクターが叫ぶ。
効果が音を被せる。俯瞰ショットに切り替わる。右から左へとクレーンが動く。SWがタッチパネルを押す。スーパーが入る。はい一〇秒で2カメ入ります！　とディレクターが叫ぶ。モニタのカウントが九、八とダウンしてゆく。BGMがヒステリックな音を上げる。次のスーパーがすでに用意されている。
「こんばんは。今夜は二時間にわたって緊急特番をお送りいたします。司会の加藤厚と」
「アシスタントの小原康子です」
ふたりの名前のスーパーが入る。
「さあ、小原さん、今日はひょっとしたら我々もUFOを見ることができるかもしれません」
「ええ、そうなんです」アシスタントはひとつ頷いてから1カメに視線を戻す。
「実はこの日本に、UFOを呼び寄せることができるという女性がいるのです。我々取材班は二週間前からこの女性に密着し、現在も取材を続けています」
「どうでしょう、岩本さん、信じられますか」
司会の加藤が右隣のタレントに話題を振った。3カメに切り替わる。スーパーで名前が入る。
「いやあ、俺はそういうのは全然信じないね。昔っからUFOは一切信じてないよ。デマか何か

じゃないの？　どちらかというと、その女のほうに興味があるね。これまではまったくマスコミに知られていなかったわけでしょう？　今日は疑いの目で見させてもらうよ」
「2カメ」ディレクターが叫ぶ。
「この問題の女性についてはのちほど詳しくお伝えします。そうですか、岩本さんは厳しいですね。真歩ちゃんはどう？」
3カメに戻る。岩本のさらに右隣に座っている新進女性タレントが映る。さあ、しっかりしてくれよ、と柳沢は心の中で呟く。体つきはそそるが逆にいえばそれだけの女だ。少しは知的な部分も見せてもらわないと困る。プロデューサーの方針で使っているだけで、柳沢にとっては最も苦手とするタイプのタレントだ。
「えー、まだよくわかりませんけど、でも出てきたらすごいなって思います。なんだかわくわくしちゃいます」
「そうですか。では原田先生にうかがいましょう。先生はＵＦＯというものを見たことはありますか」
上出来だ。あまり喋らせないほうがいい。1カメが左側のゲストをとらえる。原田は元国立大学の心理学の教授だ。テレビに出る学者の中では比較的まともなコメントをする。今日の番組の権威づけをしてもらう役目だ。これで画面も少しは信憑性が高くなる。
「ええ、一度だけあるんですよ。一五年くらい前でしょうか、大学の研究室の窓から、白くて丸いものがジグザグに動いてゆくのを見たことがあります。ですからＵＦＯの本来の意味、つまり未確認の飛行物体を見たことはあるんです」

「そうだったんですか。先生にはのちほど心理学の面からＵＦＯについて検証していただきます。よろしくお願いします。そしてもうひとりゲストをお招きしています。写真家の畑山さんです」
「どうも」
「畑山さんはこれまでお撮りになられた写真の中にＵＦＯが写っていたというようなことはないんですか」
「わからないね。光の加減やフィルムの傷なんかでおかしな形が写り込むことはあるからねえ。心霊写真なんていうのはほとんどがそんなのじゃないかな。それに、今はコンピュータが発達してるから幾らでもトリック写真はつくれるよね」
「なるほど。しかし畑山さん、今夜は世界各国から寄せられました写真やビデオテープを検証するのはもちろんですが、なんといっても一番の目玉は、実際にＵＦＯを呼び寄せて、それを中継してしまおうということなんです。トリック撮影が極めて困難な状況であることはいうまでもありません。実はその現場に中継車とヘリコプターが行っています。呼んでみましょう。まずはヘリの香川さん！」
　ＳＷがテイクボタンを叩く。ヘリの内部からの中継に切り替わる。局のアナウンサーである香川がヘリコプターの内部でカメラを前にマイクを握りしめている。プロペラの爆音が調整室の中にも響きわたる。
「はい、こちら香川です。ご覧下さい。こちらはほとんど雲は出ておりません。よく晴れていまして、ライトを暗くしますと星の輝きがはっきりとわかります。さて、ここから三キロほど北へ進んだところに直径三〇〇メートルほどの湖があるわけですが、そこが今夜、ＵＦＯが出現する

といわれている場所なのです。ご覧のようにこのあたりは三方が山に囲まれた盆地地帯です。農家がぽつりぽつりと点在する他はほとんど人工の光がありません。ああ、カメラさん、向こうです。見えますでしょうか、いままで林に隠れていましたが、ようやくその湖が見えてきました。湖の名前は……」

プロペラ音。

一秒。

二秒。

三秒。どうした、なぜ黙っている？　柳沢は番組がスタートしてからはじめて声を上げた。

「馬鹿野郎！　スタジオへ戻せ！」

スイッチされた。司会者の顔が映る。「どうしました香川さん？　なにか見えましたか？」

ヘリのカメラが送ってきている映像が小さなモニタに映されていた。香川が慌てている。カメラと前方を何度も見比べている。

「あいつ！　何年アナをやってるんだ！」ディレクターの声が飛んだ。

「待て。ヘリに返せ」柳沢は指示した。おかしい。何かが起こった。

画面が再びヘリのカメラに戻る。明らかに香川は狼狽していた。おい、あれは、などといっているのが聞こえる。

本来の台本ではここで香川のヘリが湖の真上に停滞する。そして上空から湖をとらえる。湖の東側には及川たちがスタンバイしている。そこへズームし、タレントの及川暁彦の前にセットされているカメラへと切り替える。及川がレポートを引き継ぐ。三〇秒喋った後にスタジオへ戻る。



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.